北海道農業の未来を拓く広報誌

HALだより

Hokkaido Agricultural Laboratory for Business Development

春 Vol.38 2015.SPRING

平成26年度
HAL認証農産物協議会総会・HAL流通開発事業全道研修会を開催

特別寄稿 堀越孝良
バターが店頭から消えたわけ

The fellowship
農業経営モデル紹介
株式会社大平畜産工業　代表取締役 川合昭夫氏

HAL Hokkaido Agricultural Laboratory for Business Development

http://www.hal.or.jp

HALだより Vol.38 2015.Spring

発行日　2015年4月14日発行（通巻38号）　発　行　一般財団法人 北海道農業企業化研究所　〒061-1405 北海道恵庭市戸磯193番地6　TEL 0123-35-2110　FAX 0123-35-2120

HAL NEWS

第10回HAL農業賞授賞式を開催

右から、有限会社ブルームの齋藤伸二代表（地域貢献賞）。株式会社天間農産本舗の天間幸博代表（優秀賞）。株式会社フラワーファーム大花園の大西智樹専務（特別賞）。株式会社へその国からの三嶋隆司代表（チャレンジ賞）

平成27年1月30日（金）、札幌全日空ホテルにおいて、第10回HAL農業賞授賞式が開催されました。授賞式にはフェローシップメンバー（これまでのHAL農業賞受賞者）のほか、農業賞選考委員などの関係者らが参加し、優秀賞ほか4件の受賞者に対し、表彰状ならびに副賞が授与されました。

10回の節目となった今回の授賞式。冒頭、磯田憲一理事長は「10年継続して表彰事業を実施することができたことについて、関係者ならびにフェローシップメンバーからの支援に心から感謝を申し上げたい」と挨拶。北海道農業法人協会の設立などに尽力された元北海道農業会議の広畑雄三氏の功績にも触れ、北海道農業の発展への貢献に感謝を表しました。その後は新たにフェローシップメンバーとなった第10回のHAL農業賞受賞者から、今後の意気込みについてなどの言葉があり、会場は祝福と応援の雰囲気に包まれました。

野菜のカルテ Vol.5
～病害虫と生理障害～

じゃがいも編　ラセット粗皮

二次成長が原因となり引き起こされる生理障害のひとつです。イモの表皮にかかる圧力バランスが崩れることで厚くなった表皮ができ、これが割れると、イモの表面に皺やささくれ状の毛羽立ちができて、ざらざらとした状態になります。生産現場では、適正な施肥をこころがけ、土壌の温度変化や水分量の変化が起こりにくくなるような土づくりなどの管理を行っています。

一般財団法人 北海道農業企業化研究所（HAL財団）
URL:http://www.hal.or.jp　E-mail:info@hal.or.jp

お詫びと訂正	2015年1月26日発行のHALだより37号の3ページの記載に誤りありました。訂正し、お詫び申し上げます。　誤　天間博幸　正しくは　天間幸博

平成26年度

HAL認証農産物協議会総会・HAL流通開発事業全道研修会を開催

新時代を拓く組織へ意義と連携を確認

平成27年1月28日(水)、ニューオータニイン札幌において、平成26年度HAL認証農産物協議会の総会が開催されました。

開会にあたり、HAL財団磯田憲一理事長から挨拶があり、「食糧自給を巡って社会全体と同時に消費市場の大きな転換期にあり、また、物があふれる物質的に豊かな時代にあっては、物に込められたメッセージが価値を持つのであり、つまりは物事に取り組む姿勢こそが評価されている。新しい時代を拓いていくためにも、様々な逆行をチャンスととらえ、HAL認証農産物協議会の皆さまとともに力を合わせ一つのグループとして力を蓄えながら、皆さまとともにある組織でありたい」と述べ、特別栽培やGLOBALGAP取得などの取り組みに対する意義と連携への意思を表しました。

また、HAL認証農産物協議会の山田哲三会長からは、積極的な作付と出荷、また、新たな産地の開拓が呼び掛けられました。

総会では、昨年改選があった協議会役員について改めて紹介がなされた後、議事項目として平成26年度協議会事業ならびに決算報告、協議会規定の改正として会長代行ポストの新設、平成27年度活動計画ならびに予算計画が承認されたほか、原田和夫会長代行から協議会自主活動報告として、2014年度役員研修の報告がなされました。

7名 が新たに認定を取得し総勢45名 の認証グループとなりました。

農業経営者としてのあり方や技術に関する講演会も

HAL認証農産物協議会の総会に引き続き、HAL流通開発事業全道研修会が開催され、HAL流通開発事業の平成26年度事業報告と次年度事業計画の説明が行われました。

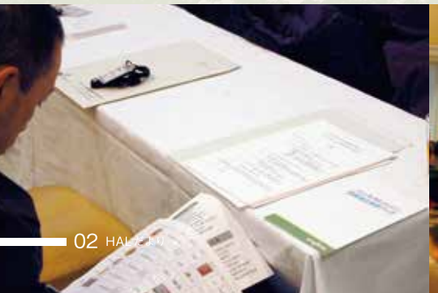
その後、長野県の有限会社トップリバー代表取締役である嶋崎秀樹氏に農業経営者としてのあり方や後継者育成の大切さなどについて、また片倉チッカリン株式会社技術顧問の野口勝憲氏に、有機質肥料の特徴・効果と土壌診断による土づくりについて講演をいただきました。

研修会終了後には、生産者や財団職員のほか、流通事業協力事業者様も参加されての懇親会を開催。HAL認証農産物による料理や加工品が振る舞われたほか、新たな取扱い商品として進めているポップコーンのデモンストレーションが行われました。会場では、生産者同士で言葉を交わしたり、講演講師と熱心に話し込む姿が見られたりするなど、会場各所で情報交換が行われていました。

■平成27年度　HAL認証農産物協議会　役員名簿

No.	氏名	地区	作物
1	山田　哲三(会長)	芽室	馬鈴薯、小麦 等
2	松井　一史(顧問)	富良野	玉葱
3	原田　和夫(会長代行)	倶知安	馬鈴薯　等
4	東條　真澄(副会長)	倶知安	馬鈴薯　等
5	塩崎　俊貴(副会長)	芽室	馬鈴薯、小麦、ごぼう 等
6	駒谷　信浩(副会長)	長沼	玉葱
7	岡本　和幸	富良野	玉葱
8	西本　智城	富良野	玉葱
9	松木　工	中富良野	玉葱
10	川村　法幸	北見	玉葱
11	吉田　庄吾	由仁	玉葱 等
12	中村　好伸	新篠津	玉葱
13	小坂　幸司	鵡川	かぼちゃ 等
14	栄木　敏文	当別	かぼちゃ 等

Hokkaido Agriculture GENKI-Project Activity report



HAL財団の活動について
～非営利組織としての一年の報告～

HAL財団専務理事　中村　眞

昨年、HAL流通開発事業全道研修会のご挨拶で、『HAL財団の非営利組織としての目標設定について』ということで、皆様に3つの中期の活動予定をお話しいたしました。昨年1年間、中期活動目標に向けてどのような活動を行ったかについて簡単に報告させていただきます。

1つ目は、食の簡便化を求める国内消費市場の変化に対する対策として、HAL認証農産物使用商品の調査研究を行い、協力企業を求め開発・商品化を目指すということでした。昨年までに既に50弱の商品を送り出しておりましたが、新たに大手小売事業者様と調理済み冷凍パスタ、インストアベーカリー用パン用粉、豆腐などを、また、生協様とは冷凍アスパラを、そのほか各地の生協様向けに冷凍そばや黒大豆醤油の商品化を行いました。

2つ目は、農産食品輸出調査研究事業。縮小する国内市場をみれば輸出の研究は必須で、人口増加や経済成長が著しいASEAN地域への輸出の研究を行うことでした。これについては、インドネシアにおける外食産業向け商材としてGLOBAL GAP認証玉ねぎ20トンを、大日本印刷様との連携により実験輸出しました。また、イオントップバリュマレーシア・イオンマレーシア様とマレーシアにおけるイオングループ店舗での北海道の玉ねぎ・馬鈴薯の4日間の試験販売を行いました。

3つ目は、生産から消費に至るまでの事業者が参加した経営体の調査研究事業と事業企画立案をあげました。これについては、1つは恵庭の財団敷地内に選果・加工施設を建設し、その運営を行う共同事業企画を検討しました。また、製粉会社様との連携事業として、農業生産法人への出資と生産物優先買取契約を行う事業企画を立案し、現在3社の生産法人設立に向けて準備作業に入っております。

流通開発事業活動経過報告

流通開発部　部長　土橋祐之

平成19年にHAL流通開発事業が本格的に開始し、以降、会員数は3倍、取り扱い重量ベースで2～3倍ほどになっています。平成23年からの3年間の中期計画として、26年度の取扱い目標数値を玉ねぎで10、000トン、馬鈴薯で3、500トンとしていましたが、平成21年から22年にかけて倍の取扱量になっていたことから、希望値も含めて目標値とさせていただいていました。平成27年度から3年間の取扱い計画数量は、特別栽培やGLOBAL GAPなど様々なハードルもあることから、玉ねぎで平成27年度7、000トンをスタートに平成29年度に9、000トン、馬鈴薯で平成27年度2、600トンをスタートに平成29年度3、000トンとさせて頂きました。この数値をもって今年以降の3年間、皆様のご協力をお願いいたします。

生産者の取り組み姿勢が評価されて2社が新たな取引先となりましたが、GLOBAL GAPや特別栽培など、求められる要件のハードルが高いところもあり、できる限り皆様にご協力をお願いいたします。

小麦、大豆、蕎麦に関しては、流通事業開始当初からの連携もうまく進んでおり、堅調な推移を見せていますが、更なる取扱量の拡大要望を強くいただいております。出荷調整の部分でコンタミなどの解決しなければならない課題があるため、急激な拡大は難しいですが、加工商品の開発をうまく進めていきたいと考えています。

既存の販売事業以外の新たな事業展開については、協議会の役員会等でも意見交換させていただいて、将来を見据えた事業として進めていきたいと考えています。加工品開発は高付加価値対策として進め、HALブランドとして醤油、パスタ、小麦粉などを販売していますが、生産物を効率的に利用するためにも、メーカー様がそれぞれのブランドとして提供するブランドとしても拡大していきます。輸出については、国外の外国人を対象としたハラル認証加工品について、認証農産物を原料としての開発を進めていくため、加工メーカー様とともに研究会を立ち上げました。また、GLOBAL GAPについても、認証取得レベルにもう少しで達する生産者が多くあり、参加者の全員が認証できるよう引き続きご協力をお願いいたします。

この他、HAL認証農産物の供給力の安定化、生産者の経営リスク低減のため、生産者とメーカー様との合弁会社設立や新品種の栽培試験の実施について協議を進めてまいります。

これらの事業を進めるに当たり、今まで以上に連携を強化し、一緒になって近い立場で既存の組織では成しえなかった先進的な取り組みとして事業を進めていきたいと思います。

HAL認証農産物 販促活動報告

HAL認証農産物協議会
会長代行
原田和夫氏

昨年12月16日から18日の3日間、HAL認証農産物の馬鈴薯・玉ねぎの大口出荷先であり、売り場としても70%を確保させていただいている、沖縄イオン琉球様を訪問しました。運天マネージャーのご厚意で、旧正月に近い多忙な時期にも関わらず、いろいろなご説明をいただきました。

玉ねぎについては、大変好評で売れているとのこと。区分としては、北海道では安い価格で販売される2L、3Lといった大きいものが好まれるそうです。馬鈴薯については、HALの商品はパック詰めされていましたが、バラ売りの長崎産も入ってきていました。皮むけしている状態にも関わらず、このような形態も新鮮さがあって良いと評価されていました。

ゴボウは太い物が主流で、こちらも人気があるとのこと。売り場ではグリーンアイのポップが表示され、生産者として協議会メンバーが紹介されていました。

ゴボウのパック作業委託先であるエコアグリ㈱様の契約農場についても視察いたしました。訪問時にはピーマンを栽培しており、これから収穫というところで、これも大きい物が好まれるようでした。試食させていただきましたが、大変甘く美味しいピーマンでした。現地は台風が多いため、ハウスは半官サイズのパイプで組んであり、また被覆マルチとして芋茎を利用していたり、土壌に特色があるなど、北海道とは違った農作業の様子が見てとれました。

今回は短期間・急ぎ足でしたが、現地の食生活を知ることができ、販促活動の方向性など考えさせられることが多く、有意義な視察となりました。また、現在、GLOBAL GAPの取組みを行っていますが、これについてもこれから販売促進に際し、安全安心をPRするツールとなり得ると感じました。

HAL流通開発事業全道研修会　講演抜粋

◎有限会社トップリバー　**嶋崎秀樹氏**

農業は今まではロスがあっても良いところもあったが、今後は大規模であってもロスなく効率的に有効な農業をしていくかが課題となる。

儲かる農業というのは、後継者がいるかいないか。儲からない組織は後継者が育っていかない。如何に優れた経営者能力と人材の教育をしていくかがこれからの農業で勝ち残っていく大きな要因である。

◎片倉チッカリン株式会社技術顧問　**野口勝憲氏**

土は命を育む物であり、土が死んでいるという事は、文明が死んでいるということである。作物の収量や品質を高めるには、その作物自体を健全にしないといけない。その為に土壌の健全性を保つ必要があり、化学性、物理性、生物性の3つの健全性を良くしていくことがいわゆる土づくりである。そして、土づくりには、土壌微生物を養う有機質肥料が欠かすことができない。